悲観的なベースボール人生

Lookin' on The Pessimistic Side of The Life with Baseball

佐賀通

Tori Saga

A KAGEFUMI
SCIENCE FICTION SERIES

|A KAGEFUMI SCIENCE FICTION SERIES|

悲観的なベースボール人生

佐賀 通

Lookin' on The Pessimistic Side of The Life with Baseball

by

Toru SAGA 2017

cover design and art direction

by

Matthew A. KEITH

(t. m. production)

悲観的なベースボール人生

「昨日はテレビを見ていた。内容は困ったことにシイタケがタケノコと手を取り合いながら二人きりでキャンプファイヤーをするドラマだった」

B・B・フェスティバル氏はそういうと噛んでいたガムを、ポケットから出したレシートへと吐いて包んだ。右隣にいたパーフェクト氏は心底いやそうな顔でその行為を見ていた。

フェスティバル氏曰く、ベースボールは決して九人でやるものではなくてもいいらしい。七人でやろうが十一人でやろうが三十三人でやっても構わないそうだ。だが、五人でやることだけは絶対にやってはいけないと、フェスティバル氏は僕にかたく忠告した。さらにフェスティバル氏からはパーフェクト氏とのこんな思い出も語ってくれた。

「こいつの投げる球はすごかった。クレイジーだった。上に曲がるスライダー。上に曲がる

フォーク。上に曲がるストレート。どれをとってもこいつの投げる変化球は真上に直角に曲がるのが売りだった。そしてそれはこいつが現役の間、ずっと変わることはなかった。こいつは全盛期でデビューし、そして全盛期のままやめていくことができたのさ」

インタビューを続けて三時間。フェスティバル氏はデビュー戦のあのことを語らずにずっとこんなかんじで周りの仲のいい選手の話や、他愛もない日常の話を続けるのだった。

フェスティバル氏の左隣にいたウイスキー氏はフェスティバル氏の話を聞いているのかいないのかずっと手に持っているボールをもてあそんでいた。ウイスキー氏の手に持っているボールはなぜか青く、縫い目は緑で、自分の名前をサインしていた。もてあそび方は様々だった。縫い目を数えるようにゆっくりと見つめながらボールを回したり、まるでおにぎりを作っているように手の間でポンポンと行き来させたり、たたいたり伸ばしたり折り曲げたりするのだった。一度、ウイスキー氏の真後ろに座っていたスパーク氏がふざけてそのボールを取り上げたのだが、スパーク氏の左隣にいたウォーター氏に咎められ、すぐにボールをウイスキー氏へと返した。そのやり取りの後フェスティバル氏はスパーク氏に

「いいか、お前のそういうところがプレーにつながるんだ。十二年前の三月十三日のあの相手の投手がコーヒーとの試合。同じようなことを九時三十五分ごろ、三番バッターのハンガーにもやって負けたことがあっただろうが」

と諭すのだった。フェスティバル氏は自分の顎を撫でながらそこから話をつなげる。

「そう、そしてあの試合の日というのは私たちのチームで五番レフトだったホイール。三塁審だったポスター、相手チームの打撃コーチであるコンタクトの二番目の息子、そして観客の中の三百五十五人が誕生日だった」

と僕に教えてくれた。

「ベースボールはな、ただゲームをやればいいってもんじゃない。当然ゲームの前にはその日その時にあった起床時間、トイレの回数や見るべきテレビ番組、着用する下着やミソスープの具によってもすべてその日のゲームに影響するってもんだ」

フェスティバル氏はそう語る。生活の隅から隅までベースボールのために。ベースボールにつながらないものなどこの世には存在しない。それがフェスティバル氏の持論であった。

「球場に一人、ホットドッグを食べている観客がいるとする。もちろんこの観客だってゲームに影響を及ぼすものだ。それは決して三塁手がホットドッグを食べている観客を見かけておなかがすいたなあ、なんて気を取られたせいで守備を失敗するとかそういうことじゃない。そういう観客そのものが存在していること自体がゲームに関係してくるんだ」

こう聞いていると、だんだんと占いやジンクスの類に入ってきているようにも思える。そしてフェスティバル氏はそれを否定しなかった。隣にいるパーフェクト氏もそれに強く同意

した。

「そうさ、これはただのジンクスだよ」

ある年の記録を見ると、フェスティバル氏がその年にいたチームでのゲームで、コーラが異様に売れた日があった。別にその時はコーラがブームになっていたわけでもなく、セールの日だったとかそういうわけでもなく、観客が何気なく今日コーラを買う気分だったというのが偶然にも被った日なのだった。試合後にその話を聞いたフェスティバル氏はすごく納得したようにうんうんと強く頷いていたらしい。その時のことを聞いてみるとフェスティバル氏はこう答えてくれた。

「もちろんコーラだって試合には影響する。あの試合では五回の裏、私のチームの攻撃で八番バッターのプリントがスリーボールツーストライクの状態で相手からシンカーを投げられて三振となった。振ってないと主張したプリントだったが塁審には振ったと判断されアウトとなった。あの一連の出来事は観客たちが一斉にコーラを買った日だったからと思ったまでだ」

フェスティバル氏からすると、ベースボールというのは選手たちがゲームを行うのではなく、周りの状況によって整った環境の中で、選手たちはなぞるように試合をするという感じなのだろうか。と思ったがこれもフェスティバル氏によって否定された。

「それは違うと思う。私は周りの影響に左右されていると考えようが考えていまいが、周りの環境自体がランダムに変化する以上、試合は選手たちが動かしているという考え方とはそう大差はないはずだ」

ある年にフェスティバル氏は提案を行った。

「今回のリーグ戦に出るのはやめよう」

それはこれまでともにリーグ戦の優勝を目指してきた選手たちにとって、当然ながら意味不明の到底理解しえない発言であった。選手たちはフェスティバル氏にどういうことかと詰め寄ったところ、

「今日の天気は雨のちボールだな……」

フェスティバル氏はそうつぶやくとバッターボックスから忽然と姿を消した。選手たちはその後フェスティバル氏のリーグ戦辞退の発言の意味、そして一言残して消えたフェスティバル氏の行方を気にし続けることとなった。その年は結局リーグ戦になんだかんだと出場はしたもののフェスティバル氏はずっと消息はつかめず、彼のいないチームは負け続け過去最高敗戦記録を作ることとなった。翌年、フェスティバル氏はチームのロッカーに居る所を発見されたのだが、今でも、フェスティバル氏は当時どうしてあんなところにいたのか、そして見つかるまではいったいどこにいたのか、彼自身口を閉ざしたままである。

特訓に山へ行ったのはその次の年であった。フェスティバル氏の提案した練習方法は特殊であり、スターティングメンバー9人を3人ずつに分け、それぞれが川と山頂と洞窟で特訓するというものだった。川で練習をしたという当時のチームメイトであるフラワー氏曰く、

「まず、石がごつごつだった。ボールの跳ね返りがひたすらイレギュラーであり、ほとんど球をとることができなかった。私たち三人ができたことと言ったらボールでの石切りぐらいなもので……いや、石じゃなくボールなのだからボール切りでいいのだろうか。とにかくそこから私はアンダースローへと転換するきっかけになったのは確かだ。一緒にいたバード氏は、ひたすらその年のチームのユニフォームを考えるのに必死でずっと画用紙にラフ画を描いていた。彼女もレフトではあったがアンダースローへと投げ方が変わってしまった」

山頂で練習をしていたリング氏はこう語る。

「山頂では星がきれいだったわ。そこで教えてもらったのはデネブ、アルタイル、ベガの夏の大三角。隣りにいたホープはそこからさらにひたすら私に星座を教えてくれたわ。マリンは山を登ってる最中、バットをつえ代わりにしていたのだけれど、途中であらわれたイノシシを仕留めた時につかってしまってひしゃげてそこでふてくされて山を下りていってしまったの。そこからというもの私はよく夜空を見上げるようになった。試合の最中なんかもしょっちゅうで何でもないフライを落としちゃうことがかなり増えてしまったわ」

計算によると、ホームランは一試合につき二本が一番良いのだそうだ。デッドボールは七試合中に二球、サードからファーストへのエラーが一シーズン中に三回、打った球が三塁スタンド側のビール売りのビールへと直撃するのが十年に一回、その他もろもろ何百、何千、何万という計算結果が、フェスティバル氏の頭の中に入っているのだそうだ。

「スマイルが妹弟たちのためにラストイニングに一人で全ポジションをおこなうのが全ての歴史の中で一回」

フェスティバル氏はしみじみとつぶやく。スマイルはずっと前からトッププレイヤーだったのだ。たった一人で野球をやっていた時からずっと。

「スマイルは決してトッププレイヤーではない。いたって平凡なプレイヤーだ、いや、平凡よりも下の方のプレイヤーかもしれない。だが私はあのスマイルが私の変な発言をするときの私に向けるあの何かジトリと向ける視線が私にはとても魅力的なんだ」

僕もそれに同意した。しかしなぜスマイルはライトでありながらスクイズが処理できるのか、その秘訣をフェスティバル氏に聞いてみた。

「それは面白い質問だ。まず、ボールというものについて考えてみよう。すべてボールというのは球形だ。投げた際にそのボールには角速度もあるし加速度もあるし空気との摩擦もある。当然重力もかかる。次にネクストバッターサークルだ。あれは円形である。バットを真

正面から見ると？　あれも円形だ。そしてベースラインは正方形となっているし各ベースも正方形となっている。ホームベースは五角形だ。そしてここで重要なのが、このホームベースは正五角形ではないということにある。ここまで言ったらもうわかってもらえただろうか」

正直僕にはフェスティバル氏の言っていることはわからなかった。けれどもフェスティバル氏の左隣に居るウイスキー氏の真後ろに居るスパーク氏はずっとうんうんとうなずいている。今の説明でどうやらフェスティバル氏の周りにいる選手たちは意味が通じたらしい。

「まあ、あれだ。スマイルは結局選手生活でホームランは五本打っているし、それもすべて満塁ホームランだ。試合前五時間以内にカレーをたべたのが三十三回、私に会った時に急に平手打ちをしてきたのが三回に、球場の土を間違って食べたのが四回だ」

ベースライン上を自転車で走ってはいけないというのは誰でも知っている。ベースボールに興味がない人間だってこのことは知っている。もしかするとベースボールを知らない人間でさえ、自転車をつかって良い競技ではないということも人によってはわかるものなのかもしれない。

一塁から二塁へ、そして二塁から三塁へ、これは一般的な流れではあるが、もしも仮の話として二塁から一塁へ、三塁から二塁へ、ベースボールがそんな移動をおこなうスポーツだったとしたら、今僕らの知っているこのベースボールは果たして今、どのような役割を持つス

ポーツになっているのだろう。

「ベースボールは様々な要素を持つスポーツだ。もちろん、これはベースボールに限った話ではないがね。さっきも言ったようにベースボールには様々な図形が存在する。この図形の組み合わせだからこそ、ベースボールが今日まで続いてきて、様々な人たちを魅了してきた要因の一つだし、ルールだってそうだ。ちょくちょく小さなルールは変わるものの、ホームベースをとにかくふんだら一点と言うルールはベースボールが始まって以来、一回も変わっていない。一回試しにベースラインを二重線にして試合をやってみたことがある。結果は散々たるものだった。選手たちはベースラインの行き先を間違えるわ、レフトがとったボールは何故かライトにわたってしまうわ、はたまた五番打者はなぜか九番打者の次にバッターボックスに立っても誰もそれがおかしいことに気づかないやらでめちゃくちゃだった。ベースボールが成り立たなかったんだよ。ベースボールが成り立つのはあの図形の組み合わせの時だけなんだ。もし三塁から二塁にいくようなスポーツだったとしたら。と君はさっき言ったね。そんなスポーツだったら決まっている。今頃この世なんかにベースボールは存在なんかしていないさ」

フェスティバル氏はそのようなことを笑顔で語った。きっとフェスティバル氏も全く同じではなかったにしろ、僕のように今現在の形ではないベースボールとはどのように存在する

可能性があったのか、という疑問にたいして、実際に行ってみたり、考えてきたりした経緯があるのだろうと思った。

けれどもここで矛盾が生じる。ベースボールと言うのはあのルールだったからこそ、今まで繁栄してきたスポーツであるとフェスティバル氏は言った。けれどもフェスティバル氏は、野球は決して九人でやるものではなくてもいいと、言ったはずだ。

「境界は極めて曖昧だ。定めるにはとてもじゃないが私一人が考えたところでどうにもならない。どこからどこまでが変えていいものなのか、そして変えてはいけないものなのか。レフトとセンターの間、センターとライトの間に一人ずつ選手が増えたところで、ベースボールは成り立たなくなることはなかった。つまり人数は変わってもよかった、ということになる。けれども、基本は九人だ。九人から増えるのか、減るのか、九人が中心の数である、ということを忘れてはいけない」

ここに至っても、フェスティバル氏は何かはぐらかすような、どことなくその場を収めるような感じで語って僕に次の質問へと移らせた。そして僕は質問をした。そしてフェスティバル氏はこう返してくれた。

「ベースボールの人がいない場所には何があるのか？　ふむ、それは面白い質問だ。宇宙の大部分は何で成り立っているのか、そんな質問と同様の類であると考えていいのかな？　こ

れに関する質問はイエスだ。では、次の質問に移ろう」

僕はさらに質問をする。望ましい観客としての態度、サヨナラホームランを決めて、ベースを一周するまでに一塁から二塁までの間と二塁から三塁までの間、そして三塁からホームベースの間を走るペース配分、試合中に飲むスポーツドリンクのはちみつ、塩化Ｎａ、ローヤルゼリー、海藻エキス、クエン酸、香料、クエン酸Ｎａ、アルギニン、塩化Ｋ、塩化Ｍｇ、乳酸Ｃａ、酸化防止剤（ビタミンＣ）、甘味料（スクラロース）、イソロイシン、バリン、ロイシンの配分、それらすべてに対し、フェスティバル氏は「わからない」と答えることはなかった。

僕のインタビューを受けている間、フェスティバル氏は一回も水分をとることはなかった。周りのチームメイトたちは必ず最低一回はコップを手に取り水を飲んでいる。間違いなくこの中で言葉をしゃべっているのは彼で、なぜ、水を飲まないのか。僕はなぜかその質問を彼にすることはできなかった。しかし、彼はなぜか僕がどうしてその質問をすることができなかったかを語ってくれた。

「いわゆる一つの悟り、というやつだ。君は私が君のインタビューを受け、そして答えを返していくうちに君はわかってしまったんだよ。僕が答えを返せる内容の質問と答えが返せない内容の質問が何なのかを、そして君は知らないうちに、答えを返すことができない内容の

質問を僕に聞くことそれ自体を拒否してしまった。だから答えは簡単だ。その質問に、私は答えを返すことができない」

その時の僕の気持ちをどう表わしたらいいだろう。あらゆる僕の疑問に難なく答え、僕の中のどうしようもない無知、まとまらない考え、人の言葉だけをふむふむと分かったようにうなずきながらその実自分の中で咀嚼し、こねくりあげ、何もアウトプットをしようともしない僕にとって、フェスティバル氏は代弁者だったはず。なのに、それなのにやはりフェスティバル氏はここで限界を迎えた。しかも何とも短い限界だ。全然膨大ではなかった。こんなはずではなかった。あらゆる相手、場所、独り言、音、いろんなものを見て、聞いておきながら、こんなにもフェスティバル氏は矮小で孤独でこんな簡単なことさえ伝えることができず立ち止まってしまうような人間だったのか。

何をおいてもまずベースボールである。そうフェスティバル氏は語った。今、僕はそのベースボールに向き合えていない。ベースボールに沿った形でなら、フェスティバル氏はまた口を開いていつまでも僕だけにとって深いような深くないような、真実のような虚偽のようなそんな話をしはじめてくれるはずだ。しかし今、インタビューにおいてそのベースボールから脱却したのはフェスティバル氏自身だ。僕は悪くない。でも同時に悪いのは僕自身だ。ベースボールから脱却した今、インタビューは止まってしまっている。僕はこんなのは嫌だと思っ

ている。何としてでもインタビューを続けたい。フェスティバル氏からベースボールの話を続けさせるために、僕自身のこの独白で終わらせないためにも、僕は目の前にいるフェスティバル氏から顔をそらしてはいけない。フェスティバル氏が語らないなら、こちらから喋らせるだけだ。インタビューはもともとそうだったはずだ。フェスティバル氏がまた話すためなら、フェスティバル氏がしゃべらないなら、フェスティバル氏がこれまでやってきたことを増やせばいい。まだまだベースボールには知らないいろんなルールが改変されていて、様々な事件が起こっていて、そしてそれをもっとフェスティバル氏には知ってもらわなければならないのだ。やってもらっていなければ困るのだ。

「うまくいくかどうかは別の話だ。なんにしたってベースボールが基準である。それを理解してもらっているのは構わない。それは本当の話だから。ただ、試合はうまく運ぶかどうかなんていうのは当然試合を行う選手たちがうまいかどうかに決まっている。一方がすごく強いチームで一方がすごく弱いチームだったらそれは試合にはならない。こんなことは当然だ」

「軽率な行動をとってしまったものだ」

フェスティバル氏はため息をつくようにつぶやく。

「私が理想とするベースボールは、すでにおこなわれてしまっている。自分がやってきた試合をふと振り返ると、実はその試合は私がおこなった試合ではなく、別の誰かがやっていた

ものだった。今更ながらそんなことに気付いてしまう。そして気付いてしまったとたん急にやりきれなくなってしまってね。もう私が新しい発見をするのは無理なような気がするんだ」

フェスティバル氏は力なく笑う。あまりここでフェスティバル氏を責めてしまうのも酷というものだ。ここは回り道をしながら、ベースボールの話から少し離れて、フェスティバル氏が再びベースボールと向き合えるように、僕自身が手伝わなければならないような気がする。

フェスティバル氏がベースボールと出会ったのは十八歳のころだった。これを聞いたとき、誰しもが驚くであろう。もちろん僕だって驚いた。出会うのが遅すぎるのではないかと。そしてそれは本人自身もそう感じている。ではなぜ、そのあとフェスティバル氏はここまで上り詰めてきたのか、そしてどうしてフェスティバル氏はこんなにもベースボールと出会うのが遅れてしまったのか。

「まあ、十八歳になるまでただ単にだれも私を誘ってくれなかっただけだよ」

フェスティバル氏は別にベースボールをその時まで知らなかったとかそういうわけでは全くなく、学校の球技であれ友人たちとの遊びであれやったこと自体はあるのだという。でもそこで大きな活躍をしただとかベースボールの楽しさに魅せられてクラブに入っただとかそういうことはなかった。そして十八歳の時にフェスティバル氏はベースボールと本当の出会

いが訪れる。

「本当の出会いなんて、そんなかっこいいものではない。ずっと小さいころからベースボールと向き合ってきた人たちからすれば、今まで特に向き合ってきたわけでもないのに、18から急にこれは楽しいスポーツだとしゃしゃり出てきたような人間だと考えるならば、私はいろんな人間から憎悪を向けられるだけの人間でしかないし、そして私自身、そのことを申し訳なく思っている。いや、こんなのはただの傲慢だな。まるで私自身に才能があったみたいな語りにしかなっていない。私は全然これっぽっちもベースボールプレイヤーとしてすごい選手になったわけではないのに」

フェスティバル氏は苦々しくそう語る。僕自身、そのフェスティバル氏の気持ちは痛々しいほどよくわかった。